
もう一度あなたに

はくりえる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

もう一度あなたに

【コード】

N3919Q

【作者名】

はくりえる

【あらすじ】

一度死んだ少女は消えることを拒む。
忘れたくないから。
その思いを貫く……。

死（前書き）

見てやって下さい・・・。

死

「ここはどこ・・・?」

目が覚めるとどこまでも続く白があった

他には何も無い

誰もいない

私しか。

それじゃあやつぱり私―

死んだのね・・・。

突然目のまえに人が現れた

全身黒いコート

顔はフードで覆われていてわからない

わかったのは鎌を持つてること。

「あなたは死神さん?」

「ああ。私の担当はこの私だ。」

「私はどこへ?」

「天国です。今からゆけば何十年後に転生できるだろう。さあ、手を。」

死神は手を差し出した。

でも私は続けた。

「そこへゆけば、もう私すべてを失うの?」

「元に戻ると言う言い方のほうが正しいが・・・。そうだな。」

「嫌!」

私は死神の手をはたいた。

死神はじつとこちらを睨んだ。

「では世をさまようと言うのか? 哀れな。消えゆく道を選ぶとは。」

「いいえ。そんなことしないわ。私ここでずっと待つわ。」

「何を？」

「私は真城君が好きなの！彼を忘れたくはないわ。だから消えたくもないし転生もしたくない！」

「ほう……。どこまで耐えられる？この何もない空間で。一人……。まあせいぜい頑張ることだなー」

死神はそういい残すと消えた。

そのすぐ後に小さな砂時計が目の前に現れた。

『もしもだめになったときはそれを割れ。私がやってきてお前を消してやるう。もうお前は転生のチャンスを失った。残された道はここに居続けるか、消えるかだ。』

死神の声が聞こえた。

「ふふふ……。やさしいのね死神さん。ありがとうー」

少女は軽く会釈をした。上げた顔は笑っていた。寂しそくに。

「でもね、きつとこれを割るときは来ないわ……。」

「そろそろか……。」

あれから地上の年月として約1000日たった。

死神は少女のことを気にかけていた。

「一度覗いてみるとするか……。」

死神は再び少女の前に現れた。

少女は心なしか髪が少し伸び背も高くなっていた。

「あら死神さん。こんにちは！みてみて、私この短い間にとっても成長したの！」

「そうか……。それは魂のなりたい姿だからだ。幼くなりたいと思えば幼くなれる。お前の理想の姿は死してから少し成長したーつまり、中学で死んだお前にしてはもしも生きていたのなら高校生の姿……。と言うことになるだろう。……。それよりもー」

「なぜまだ心が折れない？」

彼女はにっこりと微笑んだ。

「私は彼のことを忘れたくないの。あの日々を忘れるなんて私には

出来ないわ。」

「名を言え。」

「私？私の名は月。^{ユエ}神崎月。それよりもさ、ねえ、死神さん。」
「なんだ？」

「お話しない？」

「話？・・・私と話したところで何も得るものはないだろう。私の仕事はいまやお前を連れて行くのではなく、消すことなのだから。」

「そんなの関係ないわ。私絶対に消えたりなんかしないもの。またいつかお話ししましょ？」

月は真つ直ぐ死神を見た。

「そうだなーお前がもう耐えれなくなりそうなたまたここに来ることにしよう・・・。」

「そのときは一緒に話してくれるの？」

「。。。そういうことだ。お前には耐えられないと思うが・・・。」

「じゃあ、待つてるから！」

月は死神に手を振った。

死（後書き）

ありがとうございます

束(前書き)

じじいじいすー！

東

あれからもう三十年たった。

「もう流石に消えているだろう・・・。」

この死神も見た目は変わらなくともかなり年を経た。

月の任務は彼にとって初の任務だったために一度も任務を成功させたことはないが死神界では一番の力を手にしていた。

なぜなら死神はひとつの仕事で100達成し、やっと過去の罪を償って天国へいけるからだ。

せいぜい10年で100達成できる。だがこの死神は初の仕事で月だったために償いをできないまま魔力だけがどんどん大きくなっていったのである。

「行ってみるとするか・・・。」

また死神は月を訪れた。

そこにはあのころと何も変わらない月がいた。

「死神さん？久しぶりね！！」

死神は言葉を失った。

三十年・・・。三十年もこの少女は何もないこの世界にいて耐えられるなんて・・・。

「ねえ・・・。約束。覚えてる？」

「約束・・・？」

30年も前のことだ。記憶は明確ではない。すると彼女はくすくすと笑い出した。

「私が耐えれたらお話してくれるって・・・ね？」

「なんだそんなことか・・・。いいだろう。いつでも呼ぶがいい。」

死神はその日から毎日少女と話すようになった。

彼女の話は主に真城くんのことだった。

「忘れるなら消えたほうが良かったですわ。」

よく彼女はこういつていた。

そして話すようになってからさらに何十年もの時が過ぎた。

死神は最強の力を手にしていた。

さらに死神は死してなお前向きで明るい彼女にいつしか惹かれていった。

だが彼女はいつまでも真城くんの話しかしなかった。

「真城君はいつもわたしに勇気を与えてくれたの。短い間でも私・・・幸せだった・・・。」

「その男のことを忘れたらどうだ・・・。そうすれば私の力でお前を天国に・・・。」

「いや！！絶対にいやよ！！私ずっとここにいる！！！」

「それでは月がいつまでも苦しむだけだ。」

「それに死神さんともう話せなくなっちゃうわ！そんなのいや！！」「え・・・。」

死神は彼女に恋をした。

だがその恋がかなうことはない。

なぜならたとえ彼がどれほど優れた死神でも彼女の心を埋め尽くす真城くんにはかなわなかったからである。そして死神はせめて彼女には幸せになつてほしいと考えた。

そう。彼女を数百年の月日を経た今、過去に生き返らせることを考えたのである。

この死神の力ならたとえほかの死神が出来ないことでもやってのけることが出来る。

「月・・・私は死神だ。でも君の事を本当に大切に思う・・・。だから・・・。命を懸けて君を・・・。」

彼女にすべてを話すと彼女は困った顔をした。

「うれしいわ・・・でも私・・・そうしたら死神さんはもう・・・。」

「私のことはいい・・・。だがこれは最後のチャンスだ。夏の間には月の好きな男と結ばれなければお前は消える。それでもお前はいいか・・・？」

「ありがとう死神さん・・・。あなたのことは忘れないわ・・・。」

ありが・・・とう・・・。」

彼女は泣いて死神に抱きついた。

ふと少女が顔を上げると今まで見たことのなかった死神の顔が見えた。目だけだった。

その目はどこかで見たことのあるやさしい目だったように思った。

「死神さん・・・？私あなたに生きているときに会ったことないかしら・・・？」

「変なことを言うな。それはありえないだろうし私には生きていたときの記憶がない。それはたぶん違うやつだ・・・。だがもしそうならよかったのにな・・・。」

「え・・・？」

「なんでもない。さあ目を閉じるんだ・・・。」

私は目を閉じた。

束（後書き）

続きます!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3919q/>

もう一度あなたに

2011年6月13日07時55分発行